平家物語 四

リ伊5
1760
2

宮城縣図書館

平家物語巻第四

丹波少將被流罪事

成經康頼俊寛流硫黄島事

式部大夫章綱被召返事

成親卿出家事

法勝寺神事

信俊尋參事

硫黄島嶽事

熊野參詣事

藤戸事

康頼二首歌事

成親死去事

贈従院御事

宇治左大臣贈官事

丹波少将被流罪

去二月少将福原ゟおくられ世ゝ
おのゝ方ゝのあゝりてゝ居りて
をきて我方様ゝ
世のをハ宰相殿かゝりゆ給ん事を思
給ふ事や様ゝゝ
まゝ物をまいられ給ヒ
ゝるゝつゝてもかゝ
出給をゝくて

来事も無し。海中國せのをそれる示まる
うけたまはりきと申えられいお將うれ楽し
てた細言殿い海前を申へと申えられいせの
あらちちくあやあひえをへきおくを
なられもあらりれ風もうしかり
なんこうけたまひ意成をあられなれ
儀小ハ行次法縁寺執行後寛平判長康
頼いらう海へあうえ国罪おくは

川まをえしおが將ハ一すちは
きゆへお身れ父乃つんとくのすを申えし
あ川しうたあやしれつ平ふかへられて
今日まてきえすちくかうてうを事を
申かりはよふれまり孫かしつみ今
れよりくきよ海うふ能していと
欲をうを形れ申る

成經康頼俊寛行硫黄島事

六月廿六日小ハお將ハ京を行三人

つれて西国へおもむくまうし友や義
八一條より上洛せしとて小さな老さ
乳母の方にあてめて妻子をこしき
着ものあまたこの孝今一度逢ていとまを
もとめ名残をまゝ思ふ心なる
欲は祝も離れおもうしうりまかるく
下ゝなハ二度めに逢うれん事かゝし
こそ仏の国さまより林とうに小あて出家して

ゆりをこそ八こゝをくれ屋をけくうとと
ゝりをなる小ゝこ物て新くの子出家いとこ
よりさのこ事りこ極よ元い会れ祝をり
ゑくくゝみそゝんの神と形るれ義なて
くう思法事る
小りゝん乳乃義ぬきうんていはそゝ山ゝ墨ゝ神
陽ゝまゝゝ乳ゝ元ゝ世界をゝ接ゝ事ゝ長き
こゝゝ多ゝ焼て法ゝ性題ゝ乳ゝ山ゝ

三人つれて高國へ下向されけりとて
海中國七の郡より出將軍の御をめ
しといふ海こそ見渡すかぎりの沉
しきこと無限海勇みれを見るにて
をもんこといひしてかこと見ぬ美しき光
大網云劉玄德沙返事を見て涙を流
程乃形見ものも無又涙をながし
ものく後はまこと我いかりの海

へこそりをんのちは海上をんの事かこきる
よそかをりよりをもこれ前也ハかこ登
つゝに海上二三里乃流を並中をかて
中意海行のもかこまてをなる海
前海中ハをんをくをものおを
まれこ我こハまこと行三十余日より海のうを
上下向六十余日乃通をてをへを宮下のは
をを推移てかをまきをとりをは

少將あるべき憂やゆゑ忘れがたくて
加賀よりいまだ日本いまだ三十二ケ
國なくありしを常神天皇時代より六
十六ケ國よりわれそれ以後一あく
ありしふるも九列島名張作事伊与八一
ケ國なくありしをあはとさぬきを出
て四國と名付くそれよりのち一ケ國なり
しかるに播津義郡丹波を加て六列と名

付られていよ國名をかへるまいそ
うさう科をふるく國体変りべき淡
路よりれい源子すまた日本ま
里は野あるなかよりはるとそれ
れ成經も一院仁平人よおこうり
ーつい大國あるこれ大唐の勢形
ちくをつとるまこそ西國よ三十余日
行ぬてあるべき道あるとはきうりしの作

くしより鎧きて使ハ上して廿日のえにと
ハ定めしつきのとらしまきしとらふとも二
三日よよもるらしわかれ花ハ移し急ぎる世
とて又ふなく思ふれなれハ示ふとも人なりな
くて涙よりみれ事かなき

式部大夫章綱被召返事

式部大夫章綱ハさりまれ国明石よおかされ
中宮は増位寺といふ薬師まんまいハ此ふうんなり
あく故海の事成かんうんともさへあていのり
中宮は稲よ百日よ海しける夜まん夢想よ
明日まて岩間をとらし山川まゆしかうくしく流れしるし
こ海ち歩りれら絶よりまし詠し行とらんくうらを
ころきてきけハれあれ法まと紙なりしる
しりりされるなるらんと中宮よ京まそむし
流かいし春待あけいかまとらんハ大政入道
ふかき法なん乃仏み巻てら紀きてなよよて
いしふというふかりみなて所つそかんえんかい

こゝ海ゆて出よりありかたき事ゝ世利志
やうなり

成親出家事

廿三日大納言をとうてたちく事ゝ
こゝろうもいれもいそなりく文えれい
かさらをうくをとくつれなく月日をさ
むもをそれありみ事を待やなに世
小あんとおもふうと人をおもむもうり
しられい出家れをろうとあると思小松
殿よりあゝ給られうれいをもし給
へしいのくまいうれを大納言海中
をんあんやうをのちうつる御坊とかい
しをくをて出家しけりう大納言
小沢方を小山のをまれをうくしすみ
あれは山里ハけうはをよをのうかうくをを
をくををいれをを月日も言し
よわしをろふ海ゆりをを待と

[illegible]
[illegible]れたる世話おそれて人めをつゝむ程
小こいとうふ者のうりうれ中よ大
御言れうしちらくめ侍いるはん
さゝとん内厨ものこゝろ侍ありうろ
川ふけあるれのこゝろ時へ奉事なあ
教言程小面りそうりれいかのこゝれ
ゝこはちくりゝ事のこゝまひ言ふあを

もやとのハひちんのふこゝまとゝ屋ゝる
うれ行ふるうるりをゝ本ゝ別
ふとゝふとゝろるまゝ事こゝりゝ
うゝもせれてゝれハゝ道よりも人
一人ゝゝる事をゝいゝそやれゝ
らんゝれ行ゝ傳ゝ三ゝ居いゝ食いゝそ
お茶ハゝ手ゝ山あゝりの事いゝりゝ
[illegible]ん[illegible]ゝりあり

さ御とたくもうけ孫まいりさんやみまん
一くさもなかりし三夜返事をもまいらせんはな
らはかたりみえんのうれしさうしなく
さる事こそやとおもふをいひときのこゝ
まいりけれハ姫ぎミ御なさへて御ことに
うしに縁めしつゝ猶しう過て人ハかたり
けれどもさも仕面くる悲しうとも候ハ
けありさ御人一人もつきまいらせ候き

よしつねはしうハかたよりすし三御御のもと
いつまりはきあさましくと言ても衣は涉
事よりおみおすをかれのふくくはめ
うれはしは賢みてすてまりいさあられま
いられ悲しはし業もきをふめいしてまず
ま給は今は木御縁をきつまゝ給上ハ身ハ
みおてなりはもいうしい信鬼む渉みを
行かりて為御いりさんをやりけれハ小女ん

[illegible]
くかうて[illegible]ちうの若姫若意ちゃんと
小文吾殿とえんゆうにて[illegible]
りのふとし[illegible]をなくひきんのさし[illegible]
ゐまいりて武士ちゃんと[illegible]二郎よりいま一度
見ぬる事ならばとて[illegible]
いけんえんの財のつもりにて[illegible]
[illegible]ゐまいりてこれをもあ

[illegible]れとや思ひんぼうをしてたちまいりて見
[illegible]ちゃんとゐまいりまして[illegible]あや
[illegible]はの居[illegible]体よりかれたみ
[illegible]ちうの[illegible]ます一まい
[illegible]出[illegible]
[illegible]ゐる事ゐ[illegible]ゐまいりと
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

更かすに人のつとめまし行おほくなれ
ども中よりいつかすてゝ多くかきてはそ
の行もあるべきなれど俗もあれなりのふ
ぶんなるべし小さんとて六月
一日より三山雲うん院のそうよ
りきい海をこゆるに雨かの雨よりあてとき
ら場行山の雨みけ三月物くれて筆墨
事ものかるべきなりのしひかるし

みゆりゝ又作れつるさいくうして
作文ゝりいてゝ海いゝ場りうるうん入
巻を見くゝ後よゝれてゝきれあとうこ
ゝも見しかれもるゝ見ひ筆三みも
意かるみ作あるゝ海我身も八月見
ゝ見作やゝもかるゝかゝ作
作あるゝ海を出るを作ゝ重作を見
作ていゝ日ゝうあるるゝ作るゝもい

[illegible]

二三日ハかりすぎて[illegible]

つれてまいる事もあるべき

[illegible]やと海へも[illegible]又

[illegible]ゆつりまゐせ[illegible]方もハきりつるこ

つゝ[illegible]返事をハ一度はらん物

[illegible]やとおぼしめされ[illegible]つるしの見物を

へゝてあともうて[illegible]やおぼし

めされゝんとおもふ[illegible]思やりまゐ

事をんとハ[illegible]返事を[illegible]て[illegible]ま

りて又こそ申て[illegible]ハ[illegible]と申

れをハ何云ふ[illegible]おと

れをうちぬ[illegible]と

をんらうをん[illegible]

ハも[illegible]ハ[illegible]

うをこそうたへ法師事今月
小かき給ひてはけ[illegible]
つみくかつらいを
よみこしとも[illegible]
らん世よりうをつのはくそのきつを
こゆ給てせのわくよ
ひわむしのなれ髮をこそ[illegible]
こうれうをもしてりりもの衣ひの天

は法師事もありのつ[illegible]
ついてもやはたゝ[illegible]
へき事いみるつ[illegible]
これおまりかもし[illegible]
いつのこそありは[illegible]
そもあるへき事[illegible]
へとはりり小山[illegible]
れを小のさあ[illegible]

さるほとにいまこそ御命はいきて御わしく候は
なれそいそきくれ返事をまいらせよ
見給ゆれはかしこみなくとしてありける
とらて一めそ見給ける此人を横かくされ
かりとかりのつかまいりて文持しのつき候
引つきそ姫給ひ此はたりしをとて
ころよ入てけさ小あてうけよあてしる
ねきこえさかれ給ひ候清りあさしいまさ

つきたりけれは姫君は文をひらけは
さありしよりも髪ひめ髪はいろちて御
前のはなしけるにてめんくよとりわけし
くろくみ行そむさんなる形見とう
いまはあるまれ覚なりけるといまさらか
くにおもはなしとそあかされける太
政入道此事を聞てのちはいきるはされ
ゆるしあて大納言はもとよりまさきより

かやうにさゆうれ事をもうむ為乃事とは
ゑへふしをれ候ハ法てハあらてふうれ
ありとて小松殿ゆへかなしてかへらうれ
こへ大納言いきれうしなりへしこその
さまひ経りし給

足摺明神事

しゆんくわん少将ハ備中の国せのみなと
ゆく丹にふ舟よりも松ゆめして伝ち
たる須ふ出ほふ見ハ絆より國ほ地ふ

つれてめられ給たくうひへうれ
をとめんうるる小見てくれまあ色ハいそく
そとか将ハ給へハ少しされるく足摺み
うれしやくれハか将思いまして又有
理一とやそなありきを備れ力をとそ
やさしくさんをれふ備へとらうひ二人一
子日れけかすとうしゆくく御胤子れ
つまけんとや一人かりめりかて御舟

あめつちをうごかすばかりの風を
ふきたてたまへるに次第に
理一分を分るのみにあらずして
又一百日を行ずして百日を
経る人をもとりたいかなる
まことに法花一人のみにあらず
宮ゐを捨て出家せるものをもうけて
人間を化するいとまを
もいとまを

ねをしらるうれさまりしみる
をそたまいうて以は聖人也こうを
しそかこうをたのみを数をこへ
仏ほうこうをもうしうんらうんをして
ましませをすいしやくをもりの縁を
てまし海ほこうんをれ育れ因位の
時の仏事をり行ひ一神のみをを
やめう給へうんらうんをんわうを

いこゆくたしたひをもりの縁をとゆ
よををうこうおうみをりうるよを
わうはみの事をうんそ又が将れは
ありうをあうれをおとをのいうりり
かくて日をすをうを程よりをはこ小乃
さういをはうのみを乳也わうをう
代々をもはを給てそ文この示未
をれうをを示をを歌人れ

おうみのくにのこうやまうらんをいひろ
めぐりたまひきそのこうしゅうあれ浦いさな
ぎんとをもひ給れ給わられ歩行して
くるる事ありしを小野小町の哥ゆへあ
りまやかたをさまよいてをふくろ笠を
やをぬてまものをおもひれりかく
て日ようりやをひろかのふわや
へのみちをわけ給はよりつれられ給
よりこくてりうこんこうくをんこうよりこ
ようけ下腐ふるこをりられ給ふ我
胡にんをけらんむ天皇れ
うのふ高沢の新寺といふ我をそれ
をくいありし時三女一ぬんをりてをら
れ仲をたりこんこうをて
て供ぬをこくまりうりりられよりこ
く寛初竜門三尼の墓ともあるあり

しはらくの日記によりて見るところに
こともいろくの親まりんへきとん當れはおとし
山中に名所ともみゆりもうしおもしろし
地先達それ室野杉引奈とよひて月就
月のはしもはしれ源山のかくるとききかん景
のきさらえてむかうのそよ西方霧ばの庵よ

霧島嶽事

つき行かの庵円よあさくる坂とふ木ふし
ころの草ふとくとひへて後ふり絶をれ木

ありけりほんさいしまれ峯霧島のふもと
峯と今も峯山と云ふのふもと當古えんあら祢より
雲さい志よれ峯なれはゆくよ名つきてさ
いしよの峯とひふ六所権現の建地あり
かのいでし社に嶽穴あり長時よ穏出と
へありて雲につゝて地いほとに玉あり
ふりて出濱何よ出里少しとる事多
志れとも かのふ手をみふのあんちとも

[illegible]りまれふ[illegible]や
[illegible]山を[illegible]ん[illegible]
かの[illegible]ん[illegible]我この神のうん
ちをおうとなりしひ行て七日うん
[illegible]法[illegible]
八日[illegible]神のうへ八[illegible]りよ[illegible]山[illegible]
して[illegible]
[illegible]

二丈その[illegible]十よ丈八[illegible]ありたしや
八[illegible]のハかを[illegible]
こを日月[illegible]
[illegible]
山の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるいは座敷へ入りもなんを子弟行の
のあるいてそこらをたちやうなんち
小間使つきの男ひとりこうはいりよ
三ちやくはいりなるべたれ尾ものすを
ふるまうしてめうしの中ゆうひをくま
へなる平岩小ゆうりをこうをを
こうしてつうをふとちみをぶいうん
やはりきの雪鳥のそこへとちみを

きやうこうは心眼をふむうこうして御を
いとおうをきんとおりふよん仏せさ
らんよこうんふむやくうりとそこ
とおてこう眼をこうむうをへいなこう
てこうこうはいりして十一めんのこうこん
をうの眼かくをくこうしてまうろしもとく
めくこうこうこの紋そのの時土人美うつもも
ちうをすきはいりをして眼をなう

それなりにこゝろ人つゝ先せしく
まんあんさんと紙しこおうて生れてを
法花のきやうしやかこゝかの散よこゝろ
いくこゝろしやうを生をきんとうるこゝか
ゆえきんらもしやうこゝろうへ法花をと
あきんからし給へりけれ中より元
けしてをこゝろしゆんぶを我さいぶをこゝ
ちんとおりあれ生ばやりけれ中より元

をうてこゝろまれるこゝよりやぶゝまよ
教ようこゝかぶをこゝろんつこゝろうきこゝ
うう給かこゝんきの人のゝくをこゝ
給へ教華ふれをなりつゝ極もこんろうして
おうまこゝや我こゝりけまこゝへ行ふんのこゝふこゝ
ひこゝるこゝふゝゆこんこゝ事かこゝやこんし
て毎世我こゝをかこんとおりふとおりふれ
ありこゝりけこゝけるこゝものあてこゝふく

哀しくらん心くるしなりまいりけり
こゝに池ありしをられて桃尾よにはしかゝり
するしもく所きにや少将あまりなりけれし
くちく七日うんなりして法花廿八ほん
天のいしきんをりて小志よしや志くらうん
まくえくとさとれくりよつらんとききてらん
かん南字をかきまりして七それ形見にお
し梅はそうをみつしらへとききさ給くよ

かの山寺にこもりてのうしあとして侍りやと
小下かうありし少將月日れかさ所るよつきく
もあて哀にのこ恋しけるて名れもたよひ
行れもいまやうとうひらそえいそしな
こつとをまし深きをいはをなく志ら
迷ふるれありさ西やつわるもなきをた
うひ母ひとそ志ほりけるあつりれつし
ぞもやと候る八代君におれさいし給てみおい

そもそもうまれこと思わさるる事を
なげくれば
ありがたくうれしく
又口そこなわたて
ゆんあつる紙ふを
あるんなるあやと
なりてそやあ
ふを完成して

ちとみの図きしきの

ちりよつきはふお将代表を人絵て
秋ら紀貫之のりあけく蛙の涙の歌や上巻を人
こいふ名ふ芭蕉やるんとそおりめりる氏人
まん高はれあるりとうるみあり
高く弧をそそふを礼りお将い絵よ
てそりまるへと変ひしりハそりやハと思
絵ならふ九をまんらふをあるそりり
西ふよのつ孫の流さいつもかの歌

色一帯にて此潟のあり様海辺少てい
とのくるとえこれなるうゝ心えあれ
道ゆうゝ[illegible]の[illegible]さこそあるれをりよは
し[illegible]とすいつゝやきれて哀みりせを
ゆきるこそ[illegible]ゆん事ぞか
なしみきう梨あのをいうすゆいたやく
ゆゝん事かし[illegible]あるい海色をいるの
ゆゝなるみきりよりて蓼波物こゝしし

て悔の綿くゝるあるひを山館謡谷
みをを新道よハ巌波減くゝうてひ
あハ桜ゝうりゝ[illegible]ゝ旅のう新孫
かゝしきよ姉ゝる夜の月出ゝ月見ゝる
夕つき鳥ゝるよゝとをたて遊ゝ殘を
月よ月ゝ年かんこゝれ思出れてゝ
かゝ歩といふ事ゝしゝまゝとハゝう
ゝやきうゝて十二ん潟ゝをゝゝ潟ハ

あるんよりこなたかたりおくせきよハいまき
れてきよりこなたこいりの白んあう
きらしまいとうの海の世間の世後屋
きの海とそこなたおそれおそれいう島と
いりくちの海れらが将をハこの海
まりれきこいとうこまにそそやや
もとりをあこうきの海こあんくんを
白石こまのいうもそそきりなかの海よ
をこうこれおの海をして石海しうの
なれかいうまそこなたみえて
これよりかりれい白石海とひ者
せをあて一海あもてれあハなき
むこもあこんよあこ海なるれ
海かうかすそれハかあさなを
いもあるなりまあこうこいあきん
の海よハ一海よあんこあかあこ

しまして平生は思いわすれて一日たんし
と日をくらすべきとおきりとかくまて
ゐんらんもやとせもが将来まもなく
ちるいとうの浦へ舟をつなぎたりいわら
の服をうちすてゝ童ばかの浦さいて十里
ゝ浦やその地乾地ゆて山田うえ志川辺
さもみられハ色いうくゝ刺そのをもも
かハうれいはんぬのかくらいもまれなり浦の
中よりうえ山みれよハ大きゝえ畑
りくまはあるりらいなる事ひまるり
れいあるまいをきゝ事より和歌事は
しあい小さにつきるともいかり寒暑
ゝうりゆもるりうさりまかさりよりる
くふしみらをひうてゆくみらるれ
をおりわ者よてい人ゝうゝ事なす
そのつゝあるものとけ小さの人まは小さ

父うしてうちのおとうとは
くはうりまんふまんとおもはれき
うおとものおとこにたりきものハ本
はかりにはなりてうきよのきうかか
ものといふものをしんをはまれかたこ
しよをうれもあんはてこしもみし
うをかくしうをたいわりをんハ夜
ちよかうはいかしの事もすこうをひと
へよをあはさうなふ事よつきても
すこうを合いへき様なりりかの将
ハ毎ゆくくひをうれうをいをん
いかるうはうをよかはるうかかか
なりまれりなものくうあれうをさハは
新事もて成てあるのうてうる父母さいし
このハありうをつをすこうをえこ
れ重ふ四ゆをうもじうんあり人をれ

とひの流るる平家の悪霊こそおそろし
われかの海まんくとして風かすく
うら雲まんなんなりの浪まむをかなれ
蓬莱方丈えいしう三の神山の嶋は
かれの乞りとあんかれを慶しかし
かうんしはうけまうさの白石あさしき
いまうつ嶋ゆは不事はなくうむへきあ
あられ也まかこうまいいうるきのとそ山まんみ

ほまとえあ海かのかみよこてる地と
てに百千萬の雷の音記うしうし山に籠ん
大しゆりとたえて見ん世よ流きかくも
魚も見のけいかりそふてうける将さん金
ん入道いきよへも宮路あんと思われかとも
路かてれかよし流の南の海かりよ浦くさま
くとみんかくありて都の方をみかやれ
そうかはあまりよかみしこうやせて岸の

をさまれる事にはなりがたく候事と
てい つ孫ゝは一ぶのみみねてゐる者
物がたりのごとくにそれをそれ一日ゝも
こえもされ者ともあれい本ぶ をの記
あつめ とくにをむるかをそのごとく
なるいきりをむをんひてあつ言しまな
それもゝ将ゝ三年さい相の領
ひきんのふかせの庄といふ所あり

ゝ仁つゝ三のひくよあひふ
らゝる古政入道のゆ行ゝんとゝろをゝ
ゝて思ひ程ゝるれもかゝきゝ
衣ゝゝををゝれ乃れゝゆ歩ゝ
ゝんもされあがりて月ゝをゝ乃ゝ
人ゝ家ゝ命きえゆゝ衣ゝ方にをむへき
ゆはあゝ孫ゝもあゝれゆゝ成ゝゝ梅
へき人一人をゝ乃ゝさかゝ衣事ゝれゝ

いはゆる称名たにせずひろんなる
心ばせは世をはばかるもまことと
こゝハさはよはりの事ありもありさう
なるようなくかの事と思ひまゐら
せられて心さんみりうん〻〻入給ふ
ハけのこと故弥くもいとゝ弥増れた
と心ゑてこうこゝをんのやくみあ
ゆえて二さひ故よはんの事を称ふしは

ゝ事をいのゝあとをとりてあれ
ゝ迷ひなれいこゝをうこひ事をまい
て為ん明神より新しき為ければものも
ゆく来て是成て奥よ入てなくも
ありもゝ世もなりゆくと日ふをへて
故ん意しこもなくこゝを体も毎ん
七十ゆよるゝ心ゝ野よありし
と思ありけるよいと弟ん方ゝ成ゝ

それしはもかくとそこ為まゐうり為
まゝもきこは花のみよ歌かゝみん
すん事まいさこりさよ思ふ作を
うりもちをいま一段ゝ人こ事
小はあり三海をつうへ空て今まんみう
へくあり年事もありかしみとおし
ふこ沙汰の事まそはくとおて
きれてしたくよりあれ事をうり

りる中とより酒よつて廿日と中を陸
あかりきまん爰をえんうり名爰れて
北よまへまんこ海よ出くあをひ意陸よ
海と成見ゝこりれいこう祢見ゝ作り
する大船一艘出きまるかを原小雪
こんの船をまへうり屋こ見まん乃
幕をいこうり風まんこりと砂あける
をえるより見へうれを十七八りれ

女房たち出と我まんしむまとうしいまよ
やうそうとひらうえいしくさんあんし
とゆしかり哉をうれてのちいまう色
経四を中よおひたる事かうおなれ也
おほふこし給よりひそうけ多かう意れまよ
六人のみねさ給ひてえんてんの法花経机
小袖まいらせて団音よとく志あり
つかんまめいしてさいきあのめなし給

かずのまは一部妙法蓮華経要文字
横く小あるかれさ給ふうをかけて志
ゆん風よ經をせんの浦をとしてをかを
我とうんかりあれ多りとや色い此らく経
くしやうとれたら給いの程とやゝ志れ也
んとのふところみ我子れやとりくか志給
きしまい小葉て此濡よあり給とうんき
アまおりせとより入道發さあてあまし

きや後ろうさい海しゅ経くとま
ろうみく丈てまし尼くとあるる
事れ心祈んさよとうしまとに世後
ハやと教入道うとくやとりうまい日清
ゑ寺小えんけいして法花経ぜん二の巻
信仰
ちんぜちんをかくうあしまてあしゑ
ゆゑけん大しちんうんをんかうり
祈うくうち経れうきまよて文れ観姿

と今一度入せう為給へきせいやり給
ように観音れ利ちあてやとよ
熊野参詣事
ア丈をまうう為行やしんかんおかえしてん
せいやとより小熊野ちんしゅんものえあ
ア丈れまあゑ日ゑ為ゑ丈為よ
ゑまれらんけんをいゑ為まて海いりてさ
弱れう為いをやとおりひ伝ハいよ
ごやれいゑ将我ゑ心しい君れ海と

をあはせ給ひて石きやうとうしゐ
いしきやうつ称部まる一時ばかりの
ちうそうはくいしを一方ゑれたまき
れあうんいをこゝをはしてかゝるまゐり
下てゐ事はゝ〻ゝかさいのさうかとも
ゐりけとあはえいとありがれいやとう
入ゝゝやはいさんゝをかゝすゝ
ゝのこゝきゝりゐふ仏陀ちゑかあり

き給いまれい道場に入給ひ給れ
ハ書山ゐんきんとゝハゐんちハあゝゝ
かくまゝまゐいるゐん殿の陽山ふ
ゝとゐるゝゝ者ゝれゝん寶殿い
たゝはいをゝをはけんゝゝ行山海
なりゝゝゝはゝるまゝをいゝゝ
あゐゝゝんゝゝはゝゝは光をゝ行き
ゐんいゝ給ゝ山海まゐりてんゝん

よくまれ山てに行うあくてきんき
をあうあまて海のいかりをも行ハ
うやとりれいが將をかんしよこと
ひきひりうるまん志行よりさ
まひあうれい沖志ろくうんハうう事
うそうとものし故よりし返うれてうん
はえんうしまのひえいのこしやハうん
きやへうもうえんきい世ろかつ御るれ志ろ

ひうういとうう海よりさいきれてあり
りうかのうれあまりよりみれと
ろくれ志れかをくうはれえんはんうあ
りておうくありさりりとうハまん
事れうくくうい海りいまし山まれ
海事のくうもあうりうんとて志海ハは
あくハうりりり二人まん人く海をあうり
てうん海よう新よりふ入て人海を志えく

高れ話さうるも其夜亦よ海みれより
きよのし河よあひかりきくそひえ
高峯あり雲取志古峯とてつまくえ
熊野のみ神よのかりてそこみ此方儀乃と
こ路ハ雲海ちんしうして蒼天霧を
こめんをひんかくせしてたくみすると
見んとくせい白浪みねよりあれさうる
松の音もすしくて松か風も神さひ

かくりそのきいき勝山ひのあさいさんきん
のましき路ならぬ沙山よめかりけれん
是ハち山とそす東坡か影をまかなりみ
迄ハいさこそいしうして銀河渺茫
より月えんによせん影をうつし元和十よ
年せん秋長安倡家の女乃船中あして
ひくをきゝんせしつハちく楽天鶴毛せん駒
とそてめそうそんりとも尋陽江のほとりも

かくやとおもひなすまでに新敷れみるに
小さき人うりとられうるかあり
おほきなる芝尾ありそれを板一ひらに
きりあをとりんを交とゑつをもちく学う
ひたるうひ志ゑ引まうりかさうる
石巖ぬくそひへくくうんさしあ塗
赤うひうる示わり赤荒ぬそうんへう
浪石たゑるひうあらてみきうの志例

を入ちうひうあしなく西をハ毛たしま
れ波赤ちうあきあをこえん山ようこ
うりてうれしれ岩をハきかへ鹿部切
れ世赤ねらんかうひうしあうをとゑ
つきつて波方れ赤下ぬ代一万十万移所
重兒子宮宮代うあひあ山を
ようくうありしまんゑを作うれれ
更ちうあよかく志く法橋ちれ志石

別あれば海いりしやう脇屋本社よおとり
給はすとのこまいりれいそうにあん
うありりれ二人ものん人くちかふへき
浦家ありれはおれ家をあらひつさん
ものをとりまかれ七日しやうちんし
海てりにのるる窪はもんもよりを
そしやくまつる時こてあれをいさ
れこうにあれこまいあしかこのうしかる

てうこにりけるやとより法師いをの
うれうあれをうに海くみあうれなる事と
をかをくいてきまいはあてとをり
りをこうあうに我等丹誠をいに法
さてろうれ法義さんをん船更ちく
地形便をかりうれちんしをまを
かうをいくの赤ちんーやをあせう
屋よとあれをくをかはけれ夕よ

をゆちをいつるあハあれ涙思出られて
山川さよ河をわたるあはれ葉ちんふう
むしれさいさあり三ゆなるものをたに
のちくうう思りるかれぬとくさく八十
よ不れまみしまてるて有交しや
うくてん涉まへよゆてちんちあ
ちくあまくゆまた十あくよきや
くもをて拾ちうい有るれきこ

をきらう変ゆはよるまし　つまん　如成なる
をうらんちんん合かふうしとあ
ちれくおりあうんちあ思てなむ日
ちんゆ一大庭けんゆや三ふらん現和光の
めくみをりさして成鏡　性照今一度就
へ迎さ給へとかんちんをてきていのり
ゆてれりゆとりされ次て祝
をそ思ひ給ゆ性照仰

弊紙を以て謹て
謹請奉仰維當歳次治承二年戊戌月、並十
月、二月日、数三百六十四ケ日八月廿八日
日神八已未擇吉日良辰掛畏而日本国一大
霊験聖野三尊相模国 大雲塔数
金字佛、弘前信心、大願を羽林殿原に経
汝泳性恩致一心清浄、誠把三業相應志
謹而敬白文證誠大權現、決度苦海、教を

三乗因滿、覚を本師、或東方浄
瑠璃聖王、を衆病悉除、如来心、或南方補
陀落観音、を入重玄門、大士若王子、安安
世界、本主敬毎畏者、大士頂上、佛面坐
亦也、亦頭滿給、雖然法性莫如、都也自和
光同塵、遥入給、仏来亦遍自在、難化、亦
也、誘善巧方便、利益敬給、自茲自上一人
逸下万民、朝給清、有懸煩悩、垢濯暮向

深山寶号唱感應全懈時誠々々峯高神
德高爺嶮々々谷深弘誓深淮雲分界霞
凌下寂利益地不濁惑爭步運冷難通橋
現德不敬何必幽玄增步　仍證誠大橋
現龍濤大薩埵蓮慈悲相並罪障八
御耳振立我等無貳丹誠知見一々懇
志令仰受給成經狀悪意流苦心罪舊城
友卿令付當人間有為妄執連法性無為
證真理而已能則法界玉函不拘洗各
機隨之緣流引導無邊緣部類為救七
寶莊嚴捧捨八万四千和光六道三有
塵同治友定業亦能轉求長寿得長寿
礼拜連神無際漫々深海罪障堪重々誠
々高峯懺悔風扇戒律弄意心潤悲摩
衣重覚道花捧神殿床動信心之證利
生池浪神明仰受給亦願何不成就作願

十二日宿況利生翔並遍翔苦海底慰
尤遷愁速令遂帰洛本懐依致白毎所
少々事沙汰ハ尤ハ[illegible]ん
の尉康春ハ[illegible]
[illegible]事ハんとおもひ[illegible]て大えの迫
所ハ毎事ハ[illegible]て[illegible]
の沒路[illegible]
時をさへ[illegible]

[illegible]宗廟幽[illegible]かのうん[illegible]文の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ありの秋もゝ秋のうゑ小ぶりかゝるゝてゝま
はらわるよ清き水ぶ[illegible]おもひてたかし
りぶかくまう清る事あてもん八月より
れこゝをゝ言葉小円九月上旬ぶし
けりよりあ日ん文まてゝ
義清くゝとゝむけをくあり花を
いろりを信心きりにあいーをくよ
あ為出て為もけよりちもんけんから

こゝーの清新句もちまゝ花よあるん花
して蘭をゝ咲おゝしてあ蕊かゝ義
りぶよ花八蕊の二ゝとりゝさ数
かぶを見也一八四かりゝむしくいり
一月は二文字をゝ小ゝり又ゝくゝん
也ハ音を一首ゝ[illegible]ゝ
ゝり
小子振神八いきをゝのゝ人ゝゝ彩八四ゝ

やとりへ通さるる人は何あれ
ば、ふと来るのいくさりは、
将ゝなるお将ゝ
やいまはらんけんは、ゆきあつ
うて、新くゆん事、一定みりて、
きれんそれ、ほよやとりへ通る
ハ入通の影は蜘蛛ともさとは
むしとりかるを、ほをはるまりは

けさはれるこんのおちかりはは
らん、ゑんの内ゆ、やはくかは殺
通されて、多給へ入通も新へゆん
ものるやこおとひてつるそて
二とよるれてしうあやーしへいう
あもおうるる人ゝんはるおはるて
殺をるしてトかきれりやとり
ハあやーけるをとれるのうう

て浦人海人あつまりて念仏を
すゝめて同音に念仏を唱
へて涙ぬらすいとりわらべたち
のいみしき事をいふも山舞れ
おりしかるにあられをやとこそつゝ
念仏をとりかはれ浦人海人も
うたりあひ下ゆ今あるとやうなる
つゝしかるにより武蔵の国

康頼二首歌

めくしの中へとそきさみく一面に
八の字をそなへてその下に行ん月日を
書さり一面には二首の歌を書
さりまかさ真ゆきに我ありとたやはつまよ八重
思やれたりとおもふ旅ゝもかさ八重きものを
此二首はうたはさ平列友やとうち涙
こかるまの我かなてつわれん人をを
らんしてやはらかなりへたりうち涙人とう

そもそもこふたりは渡たれりて候よ
あふきてちかひりうは神ゝく上はほん天
帝しやく下は四大天王閻羅王をんらう地祇
別しては日本第一大霊験熊野證誠一
両所権現一万十万金剛童子日吉山王
蔵王大明神あはれとおほしめして我ら
流くこの業かのうと日本北国在
殊くときおんして西風のふくさはは

そもそもを八重のしほちへとはる入ける
此のきおんのきよく〳〵おりふし思ひや風と
なりけりりん浦んしくそる浪のうへなかれも
松のしみつせんすむなれをなみすひら
も風よそそ吹れてもうみ日すまく
そもそも一かんをくもの新文のみなくよ
つきうり苦李浦かんとの身て後まの別
當かんれしくとりて渡うりうれともかん

ゐる人りてやみぬりて又そて
て一ちんいあれてよいたてまのた縣
ちんぢ前ゐそとりうきりけるあられな新
事ハやとりうゆりるそれや新
西海ちんなみよ三ケ月ゑえられあ
きりのしうんさよふとりく部をあく
ちあてあらくちう方へ飛ぶしけり移よ
夜風とあらとかの治へちりていきよ

ちきりうやと思られもあるぬきて
ハ私もかふ事なりまるたりあき人
みものわるしちしあるふうよ三ちん風をもて
ちりわられみとりられいうやもとる弱ち
新へよの池のちぬたりうりいりまりて
ちのをちりれをきりるやいうにたをあ
つるいいちへれみて思くあれ
なまそりふりんきりられい

つくりまの社へまゐりぬ此神
はまぢさい西をとい けんぶようろう六
ぢ山ようくそひつく 等覚めくかくはん
逆門八十四十めはん 秋の月よかくとり四
ぢけゆうれ三ゆ三 ぢんは廿三天の表花
をたうまとみえうり 海とふ大日はも
い地真言秘密はん 浦とう慈りり
う三ぢまくい海とう 海とうう三ぢもくい

とかるれわくとう 四ちんの梨やう
うぢくうりとい ちんもいうなりるいん
ちんまて仏神かぢ 海時ようちちよ
えんをむとちんと ぶりもあれやう
ちゆ大明神八三十 三ちん九ちんあり
はんちんは逆門つ ものをゆちん
ものは芸ちれい一 なうきいれれ志
やうりさいれ須あり 一さいぢしやうの

而仏をとくとかのふへしとの御
ちかひあり我のそむ不い会んやとうへ入
道ゝ死をくるとしてのこゝろを人勢強
へうしいはてしてせんをうれを要只
うやうきちいゝ仏神ハ大設
入道ゝに崇敬し給へかれい
事家ゝいきとゝ残りなき金をかうあ
りへゝ神もいかゝおもひ給へ

なきをいかりあ被祈られしい祈
うをよりけを意をまうけ紀
日も言はくよりはりはりいてかみ
ちけるあうとうなれたのあれ
意仏中よ小ゝとゝ模なれものたれ
ハあ中ゝかゝうんと思くうてみも
ハかの二首のうゝを書うけうたん
てあられゝ事かうりすいきん

後をまつてをいのかこまうて故へを
らうてよくやをよりうをれこをを亦心
らを紀貫之の詠て云をうりれを老母
さいしあつまりて　をのしをををんてか
をみの海ををあり　貫之新古今を
あをうをうりををを　をををを

あさくうてかの海うり記してつ
うりうんこそなのうれあれあまりまおと
ふ事ハかく程なくかるい者もやてこう
やとより三年ゝ命きしやて記へ文を
ほうこうとそけ二首の歌と都ま拾歌
しられをかのそとそれ事えいんよおし
て然しいてそ忍いらんあり海ゝたやと
より法師うま拾やとそうも海ゝ多人見

をなし霧れ命きえんやていまゝかの海
まあり法事のむえんよとそ法員新
新ま拾遺をま拾ひ法をかし
けみ記首大江れこと出家のおら大
唐国ま記国阿育大王ゝつ拾
てし八万四千基れ石塔四月不江列石
塔小一巻員事をかのえんえん遠あてか
きあうまる事れうまの不をう

[illegible]
[illegible]
あられみりけ事小松内府参行てかゝる
あられみる事うらゝかやうなる
う沼あそれ[illegible]部よつてうりてあと
れみる事まそれとも世間は投籠し
ひとそんうとへ入道殿参れば
れを入道しもし給ふ棹ものれ

人まろい沼うれ沼松とれみ道れあ
う人とあ一へんあるもの世紀有扇
神いまさそれの思をみものの沼神
板うるの門をるそのそのの人と三十一
字をり矢沼ひしりまれ玉ま沼神
け字れうる一百ふ百れおとひとみ行い
んやち殿入まれ事あ神れいく
け歌をあれと思行ハうへき

昔かゝる事ありし漢の武帝と申す帝ま
くらうを服君とぞいふ服をこゝろぶとい
ふなり君とは人の事をいふなり
めしてうけきこゝろを奪ひうばんとする
李陵といふものを大しやうぐんにして
十万ぞくをしたがへ
微力をもまして勢ひをいたれば
匈奴はいくさにまけぬ

そうろうひて敵はうちよせ李陵をうちかこまれてこ
ゝろくれ身をほろぼすなるべしいまれ夢て李
陵をいましめとなるべしひつぢはこうたし
やうぐんはえうひつのうりけるかくこん
ありけるものをとそて李陵を毋をうと
てやうちうしゝ父つうをうりてものか
嫌
うをそうけ兄の李陵のこんをい
兄弟みなりて罪なき李陵をほろ

学てかのみをくみていく我おもし
きこゝろつい討ん使あんまれ付い
かのゝ武ゝ右のゝんよ忠をい
しこうんとゝをゝれとゝいゝゝやれてのゝ
胡王ん〻あよゝゝれてけのゝをゝ
ゝむまをゝしいく胡王をゝゝ用て自
ゝのゝみを新ん〻ゝ思けまも
今かゝるあよおひゝゝるゝをゝ胡王ゝ

のみく年月をゝゝゝゝよ武帝我よ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
陵おゝひけゝれゝゝ漢ん〻く
さ有ゝ事と帝ゝゝゝゝ事よおけ
て天漢元年ゝ事ゝ将軍ゝふけゝゝの又
蘇子卿ゝゝつゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ
と右ゝゝよゝゝて右将軍ゝて又ゝゝ
騎ん〻ゝゝゝて胡国ゝゝゝゝゝゝゝ

小穂子前とは穂武とぶこおとをあり
て軍ゆんとをを治とて武帝御ゝ仕給
ゆとをいゆんちう命ゝてりゆおへしと
しゆんち死なは我方へ返ゆへしと宣命
を始められたりそそふこらくへりて
ゆあをとゝいられとゝもゝ始まけよられい
大将をとしめうとゝゆひとゝの三十人
いけうとゝて塚ゆんゆよりあをとゝ三年

こいるよ元七ひてひさうりかあり
をゆてあれゆよりをとあるゝ二百二
日よゝ始るもあり有るひい今日六日よし
ゆ陽をあり始一人いきゆとりて
年月をとる後ての悪しき事ゝ言ゝ特
ゆとをはもなゝ多えかとゝ悪しきるか
なり物ゝ為を引むゝふあやしれかり
のゆりもゆれいとゝ野とはのゆゆよ

ちいあり きて 春ハ四月 夏 秋ハ九月 冬
ハ十月 ひつしまんら 我のこゝろ をしてゝ 海と
あり きけるかゝり 者れも こゝ 四 者 新の
こゝろ おとゝ 作り 秋の四の 面れ うも 他國へこ
ひゆけども 春ハ 三月 海 者 ゝ あり 我
おふ 遠へ や 行 者 ん と 者 ゝ を 思 れ
朝夕 人 の 形 事 ゝ れ か り 一 と ち つ き
ゝ り ゝ る ゝ を 海 右 の 桜 ひ を ゝ い ゝ り て

ものゝを をして 柏 ん 筆 よ 一 筆 かき 出 ゝ を
て 百 れ つ を ゝ る む 出 ひ つ き く と ゝ ゝ く
ゝ り 武 事 上 林 荒 と ふ 所 よ 海 行 て 女
者 れ 我 出 筆 し て 海 柱 あ り ゝ る こ ゝ 百
ま 百 一 行 そ ひ 者 く ゝ ゝ 雲 の ゝ く
小 初 者 れ き こ ゆ ゝ と 海 者 ゝ 小 一 れ か り
柱 ゝ こ ひ そ ゝ 百 わ 者 や 一 こ え い ゝ ん を
ゝ る と ゝ ゝ 百 ま つ ゝ に む 出 ひ つ き ゝ 海

みをくいてうておこうりけるを
むしけんををみてかんきふをそもつる
御門みつから撥遣あり其状云
昔、被羅巖嶋、洞徒送三春、く愁歎今、
被放秋山田臥宮爲胡狄之族失一旦
設此身留而移胡國魂還而再仕漢君
ゆくえをこうりけるをを御覧して帝御
涙をながくこうはいまいらえて

ありけるものをとて形律とゝ賞若を
大しもの軍こうして百万きの勇士を率
ゐくゝこしくをあ行かるけ度を胡國
をいくさまけよりをかをいきれ
こうりれも十九年ぬ星霜をへて
昭君をこうりぬしして旅へ向るよ李陵君
れ御こあよ二つ乗中よりをく流い
こうれた将ぬよえこうれまいらをー事

面ともにめんうちもんその一心ふかれども我
ちゑくうん豊臣秀頼事ゆゑ合戦
れく我ちうくふこうてうれはされもいう
ふうして明日をかうりて城門のゆき
めよ忠をいてさうむとてはなつるいま母を
こうこうれ面いう弱父かりよりおうこう
うちうちかはほうちうんいうよ思うんかう
くてきんうちけ又あやまりはちんあい

兄弟一人も残らず罪せらる事つゝ
ぬうくこゝをいへとも文を一巻かきてうぬ
ようこつて武帝のうてまるてい色
をうん行よ其状云
雙鳧俱北飛一鳥獨南翔
なりて帝ほう帝たよあうれを合てもう色
いい給ひれとも加かんうぬかんてい
よまりて渇うてうこゝろよ

[illegible]
れて胡[illegible]
て年月かゝりつる事[illegible]
み欲しき事をこゝかゝりたれ武
帝[illegible]
戚ありて[illegible]
うも三十[illegible]
[illegible]の老翁[illegible]

八傳息国[illegible]
[illegible]孝宣皇帝[illegible]代神爵二年[illegible]
八十余[illegible]
小[illegible]門[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のりもつとさ芝ハそとれもとりてかれい
一巻芝ハ二それ奇うれい雲海を過し
芝ハ派のうへをつてこいれハすれをて
うりむへ芝ハ三てひん義さあよりわり
ろかりる事ともるを上た末代者
今世ハかりさう井を見て礼も思ハ
ひとりかくわうれをれ侍しけるやと
教うちやうて平れ歩の討やとをとたのく

小こまれうやしまして父やとりつとも
して見をりくりけるつやとりも家
しうりれい屋をなくさるのを
屋しうり記へ泡とくやてしやうん
けりさいして百日清ふるえん為い寺法
花経を供八うん供をのはよをんけうん
をみへ清く百ケ日供石隅長生るわり
もあり風東沿るはしあり移りくハを志

大ひ[illegible]ひ[illegible]けん[illegible]れる事も[illegible]
きみの[illegible]色し[illegible]ぢちひあるあり[illegible]れ
ば[illegible]ば[illegible]く二[illegible]ひ父よあ[illegible]
う[illegible]ば[illegible]と三[illegible]三百三十三度の[illegible]
いたけ[illegible]かた[illegible]ら[illegible]ゆいと[illegible]
[illegible]判及へ逆の[illegible]
う白馬[illegible]て[illegible]
の[illegible]白[illegible]

[illegible]と[illegible]ときれん[illegible]
て[illegible]利[illegible]
[illegible]は父と[illegible]
[illegible]お将や[illegible]へ逆[illegible]
ぬ[illegible]て[illegible]
[illegible]を逆[illegible]お将
[illegible]
[illegible]ハや[illegible]
[illegible]万秋[illegible]

その夜ハかん文廿五日の夜し給夜さん
更おかしてお将夏さまりみふと
なくれたの方を見給へい天ぞりに
ちよと時ばかりしてれ成の方より大船
一艘出来り三さいよりてよ三さう
いく派をしりまりあの船中より
かまうもんの多あて法花経の音声
かんをとをれ仏人あてうたて

けなるとをし八人出来て作られ者
毎はみんちう旅よいまりかふそさん
文ハかりの三日あり成へ帰まん事
うちうい者人かり仏来蓮秋さんこうる
しあるし我を誰とうかふ三ゐう殿
実ハ天ぞしありまんしゐ殿くこと
をたきいみれはいまりとて西行
ゐと義よ人行ひりよりこりさまと

八事もおろそかにおぼえて心ぶん
きんとくに教しなびける

新大納言成親死去

新大納言成親卿ハ
さんかくに出家をいたすべきよし
小いとゝ忍ばせ給ひけるが
さうし人きいとゝ前世ハ
てかくうまれ給ひ
給てきこゆ事ハ将也

いとゝ御心ぶかくおぼしめすものよ
うにおぼしめしたるもあんとゝ思ひ
こゝろ迷かるゝ事なくいとゝ
哀しくて日よりさびしくよりう
ばへり思ひ給へりあやみ給ひ夢
七月十日ころ不吉物もゝ
ゝ出給ひ
く今一度あひ給ひ事とをくて

今きえんとする事をかなしくおもふれ
ども力なく涙のうちにすぎ行やうを今は
かぎりとあと枕よりねてあるれとふ人
一人とゝまらんよりの義ものとてあるは
あるつゝものゝうりあり大仏殿をゝ松
門前はかくして入道相国せんとよ
りてうくうしてあいをへきの法師
をうを意給れをあるはつゝ孫と成とうり
大仏殿をゝいしやくゝ小つきうりの船
ゝとゝ中をうしたる大仏殿入道殿より作る八
尺八海中に沈あるをゝ事よ
つゝもゝみうくゝゝ小よつゝ孫と成ゝ
頭をゝらくゝゝとゝ中山か
そうる川をとゝ名あるゝ所よあるれ
屋川をとゝいとゝ山等のゝう
水をゝいそよゝ下あてゝ人をれるもゝ

[illegible]ひ[illegible]へ[illegible]ひ[illegible]へ[illegible]てまいらせたるとん
ぢ[illegible]れを大仏云けよりおかしてそも
かくもそのうへいよいよそこつあるとのま
ひ[illegible]れるかの山るて[illegible]んそれをそ
きこゆたうそきこうりをそなをを借
てやうすへきくりうをあハこうく
いきうりをるよりて同七月十九日
[illegible]れうをるあるをそなをてある

れそこよ籠をぶつくよりけを道
きてそのうをつら成をひけてこ
しうみつけしうあうをれをてを
きこうけるを大仏云へ道をり行そへ
へ行あそそのうへをあるを行ふをく
おう入行るをよういうを事みれた
屋そうへあ大をそねをてうつうて
うけ事かくしられを世をる拝殿

しらぬ小さんこうこけすをたづね歩行
人々の中にもかの人れ
黄泉何取一往不還去臺何方再會無期懸
書欲訪存没隔路兮飛鳥不通樹衣欲寄生
死異兮意馬徒疲　といひかいなしと
しを今一度人ゆる事もやとそこう
憂身みるかみをもつきてありつる
ものいまはいひうしなひて此方みつ

からけんをきうり始て雲さん院の
さい講とも　たのもあく出てかいをもと
ち始ひ行り又その方みくて新のもと
川いせんみるもいとうとかれるくいも
ひつみくいきまくけるうち君あるんをむ
ちひ始ひ行る日八姫君八ちこみをはみひ
め君を我ひ行日をもう君花をもうり
みして又さん始をもうひ始ふもあ

それより付うつり事さうたのしみまて
かすかに来て人共とをいとそみしに
と云大仏云れ沙いとを小松四郎殿
の方より行りあしさうして海くをを
ムりものあり引り出をみる人数多
あいうあ紀あまを四方に成ちろ
これ方きうやうさうされ方仏云ぬい
このあり海部は横くよ少えり歌日

かとに成つみく屋敷おかろてく出死よし
小松ひうともきうあ又けくをを入
て出先をうに出と四人奥よこきい
して海よ入そまろうるさて
ムり紀籠よつ尺うれて死ぬい事
事ハ海くをおりきう事ハかの智明うさい
あいを山と先三人あり七月下三角ん
をんうより一成ま物やまいつそ物をに

物よりいとく行ぬるやうにはせよ
事入て行ぬきりくはつるなれども三
人ゐうつ家とゝ小ぶりなるを
云はしいとおそえて
そおそろしかりし事ゝ形るうそし
大仏云うれ行て九日ゝ月るゝ
ぶりは天かくりゐにいはいくふ
ゝくゝる一時ぶりゐ大洗ゝいる祝

ゐり雷てんおひゝてゝゐらて比ん
そこよ於ありきつ孫ゝよ到のるゐな
しゝゝ義命おかりしはくゝ
てゝいの道よゝ海ゝをなりゐんら
みゝいそいわんゝん小ゐゝかゝ歩ゝな
ゝくゝりくゝ六ゝ家ゝんゝゝをゐんゝ
社次郎代事ゝ要てたかおゝれて立ん物
二道のおのこゐりれかりきゝ良ゝし

忘ほうたんうしきをとりて帝帛
をうけかこまてたよりいく我わや
まりのうえれあはよるすをはふ
うにきいうくはよりて人のえ人畫こうと
やおりうをはを三のきりのうりをあら
かのらいおらうる示をとうえしかと号
を人ト意るハは大のえハをんをやてう
ちうちうは三後をきにあるうえ人特

よんはうけ行る事ハかる人なはよ
ようなり又めをこえて見れハは人金
京は三条示をうえるつねよりうをおはふ
事あり者り彩のをむ示よかる事ハあれ
みうあやしみしよかをうをしてハ
ら形のうくをんをいうはしうる迎あれ
ハしかをし事こをあり

讃岐院御事

新院えんーうらはんはハうあ三院と

中分法皇九日廻幸あり崇徳院より
去保元元年七月十五日讃岐国へうつされ給
ひしくはしき事は西島ますくけるに
ちかいさわきの事今は一至藤野右大臣と
おう嵯峨よりて勢ひ強ひなるかはなりてみの
をうよりて西をそなへ東をそなへて勢ひ強きさ
はきは院の方一方にて世ひ強ひ方小
河殿は法隆寺院かくれ

給ひ給はれ法門よりはつへしと事し拙
うかなくしてそこをうこうてはは蓮
如上人おそれ中分る山林より海分りて一方
海をの道より入り分様より院の内あとを
弱ましく為てうんしうへまりなを為ふ
西よりいきかくそこくこくこく

八ゝやとゝ門をたゝき侍事のかなりけ
ば八蓮は西ゝりゝれとも人をよる人事
を場所我をるゝうんせいの身のみふく
新しかゝうゝき一日人をまてゆりて
ゝやはくれはゝうゝんとをこ
はゝよゝくゝゝゝ

わくさうしめせとはせたまふも
高麗の詩あて今しやすけ思いて好はせ
うりうへよ今一度おりみまいらせんとて
くゝ寄り院をきこしめしてゐる
みれば涙もとあつと蓮如ゐくくかくう
ゝ仏
身をもてこれ九度よ入ゐる春よりれて涙かすさ
院をもめしくこれいこそおりめられ

れと人ゐもとかり行をゐ故あを
てゐる行やを久しくあてゐもはこ
と柴をいるかこよせよやあ河
めこれ九ん法一巻をあれ出こて門り
ゐくゐけこ結ゐ尺蓮如を成結て月出
光ゐの九れを
あさやこうよ函出こつりとるあ出者
蓮如仏法一巻をこれよあてかゐよあて

そもそもこれ事かたりのつたゆる様は
きわめてあるべからずやしかるを
てにはもかくこそいうべけれ巻の
こころおのづからきのの歌ばかりはあれど
めるみる事はあるべんなきそのこと
ふくてをたてて法師ばかりまいり
まてをはるるよかくをへてえんまの入
るべき事をしらずこそこそしるる

付くも今はいとうきぶしのみ
度しやうぶをもとめてもとめこと
へはいとうかへ連如とはあるよりて
後ふるやうしの意しをたうき世をいとて
ひあり君意ものなれかりのやふに部より
ら物語ひてもなかりはをとう物語（さて
いとうき浦へまいりたんとおぼしめしと
連如をかるる法華世かていまりあひ

屋しきをたいとうふけて為さく
く屋のうち出ず蓮かうの事 肝心
よれ伊しめうれて今世其事をわ伊ず
ものをはしめうてさいれうくあ部を大
きう事をきを竜よ三年ばるかれあり
めう為ひて伊出ろへ中を為ひる
八ものはよ公部乃大きを絵を三年ゐ
ものありめてを具鐘の為しきを取を国

小ものをきをもんを事うをてしくなか
えれ公伊絵ゐうを為ものやうを色よ
をれをれ公ハやをを中を為うをひる伊
書れをくよ
をゐをう為ハ為ものをを為ハ松を祝をのををく
伊出ろうり公ずし関白殿へ中を行み
つうう関白殿旧裏へ中を為ひりれ武相
を入道信ゐうり中ゐいをくうを事ひへ

き敵国に対ふ所にとゝろかいあつて
まつり給れハ御給を給へ入まいらせる事か
なりへ共と給下されり新院は事きこ
しめして為憂うあるまつかんら
くさいきいうんあいなるまくあるひ兵衛
佐をろんしあるいをとらせい給をあら
そいてかりせんをなる事つ孫のあるい
あれとも全あるまいおとりふすり給ら

まけ給又ハ敵ハ給れと共ハ敵あり場
てかりんよきてハうてとふ打こ
ふ事あやある神今あく行ん人をて
かりなをうんをハ今しやうん事を思と
てハ生業接まあよ給をうきをうき
ふをとふ意ゆるれ出世むとりせんこ
きれふあるハなしやうまくれを記さ
じあれとも大あくこんをてをおゆめり

仏れいぶつのこの記をかいき給ひて
その血をもりて御経をもん軸へとをふれ
ちらをもあそ[illegible]る我ぶつ大乗
経をこめ遠あみけこうてこのたんもし
ものたちをもりて日りんらをもりもほた
まをんとりんらい給ふくものないれ
ばをこうを給ふすまるこうをくれこら
小みを給ひくく九月十[illegible]辛とり長寛二年秋

八月廿六日御ぶつ四十二ゆく志度とふ
所あてはるよりれを給ひよりり御書
をいかるを高野山へをりあををさいこ
よ給ふれるこをやをれをいかを給ひ
ものかりをを
去仁安三年九月の[illegible]金
面の御のらをは大法房圓信ををいを
書給ふ[illegible]御しけるよをねをん松山

とい和一ホ歩て先ハ新院さまとせ給ひ
ホそかりと思ひまゐらせまゐらせられも
その後もたゝ歩ホ松の葉ゝ雪ふかりて
道をうつみく人ゝかよひしあとなし
しなゝ成湯より急なこゝろ所ようて也給
ひくゝ少し久みりまれハとうやすす
ぬらい道をうたゝんとする雪こゝ人のかよ
へ松ゝとうち頭しく白雪とふ所ん

侍基ホ和ゆまりうゝ者ゝ
ゝ国人の碁ゝ所ゝ者ゝ
ゝりいゝりゝ侍ゝ者ゝ葉ゝくゝ
給ゝんゝゝ見ゝ和ゝて首ゝ十ゝんの
ホゝゝゝ九重ゝんゝゝまゝれて
し言し給ひ小今ハ三条の関ゝまゝ
ひくハゝまゝゝて女ゝまゝく
ゝんゝホゝゝゝゝゝ事なし翠帳

江国は中よりこゝにあるゝ
ゝあれ龍樓鳳閣ゆんゆんは二八さんとか
ゝにたれ行舟世よ嘆ゝ威徳朔
よりこゝにあらはしよりいたるまてあらそ
ゆるゝいあれいえもわるこもてしな
ゝ世さん中いこゝもかなてもわるへ紀
かゝと思てきく法華ゆさん
へよりこゝ法花こまいたるゆる極楽と

ゝ念仏こまいたるゝ法一人もなり
たれを
みを法の法よゆゝ形ものゆゝをこゝよ紀
こ僧ゝたれを法華振動してたを
ゝよゝ雲ゝよ者こゝまゝゝ法華ゝあゝ
たりゝあれ火ゝ法憤ゆゝ利る
を法忘ゝ紀ゝゝみゝゝ者法華
ゝゝあゝてゝ讃ゝまゝたゝ

金子ひとぶくろのけ神ついてらいく
すもや京都五のゆとてもかくしんのらへあれをもん
こうみょうりんをもつ碁ものとくこうまつ
場行ひ寄ゆはあん意もつもらるまつり
ぶらんとろれわ先ーえ松のえさまて
居をむをひて七日七夜やん念仏して
碁盤をうついまよいあてまり出りる
ひりりけまんなる松あかりを立つ平り後

ひさめくえ我のらけ世をとくよ松あ寄ふ(き人もあきを
八月二日宮仕たた贈仕を事あ人
をそうくし少何を帰碁かの碁よま
かりく宣命をうきて大臣四一位を
をくらうしすをそ讀をまる伴ん
碁をもやまるの糸添の上歌河上ん
林般若野ん又三まいり昔保えけ秋の
をしめよりおらてをそられのらい

死ういをおかせるとて年こせん去
の年よりこれをけるかいはらるく役あるを見
宣令をつとめんと元祝いをおこなはけむ
かりうつすに思ふんうるれ事ともありて世
みうれをして事あるに役ひとあんをたい
まとうあるとうとくにんくをうけ給
ハかりに彩れ者まある人義をうたり
りるハうねきの院寄進の侍りよ奉た

対又腰輿よりしく先ちんよりひ在給ふ年
右馬助あまさ仕ねらんを仕立除列度為
義をそくこもみ別引てて新合をの
勢三百ようきてそあるこ侍
て侍りしん先こるはけるり忠雅卿
朋の南門あて山まる我ゆくて芝ハ入るこ
侍りしをは仕色しくるや人とを別ハ尼寿
ん行よ院侍而ちる殿へと給れ

八てまさこ中ノ乃ハそれハい當時ハ
新ひ一ハ日ハ山ハん法宿ハか
ハくハかハ一ハもねさ中れ
ハハは大政入道殿ハ八条へと法れ
ハ取ハて三百よきんつものも内
ハよハをつくりてハくハ門ハ
入ハハハくハくハれハ祇園
入道相国ハいハハつて法皇を

ハ奥ハかハまハりハくハりハるハきの事の
ハくハくハくハかハ西ハハけハハハ
一ハもハよハハハハハ法泉院の法
ハ法ハハハハ海ハハ花山ハ皇ハハ井
ハハハ法三條院ハ法内ハかハし方
民部ハんハ意ハハハハハ取れ杯
三條院の内目ハハらんハれハハハ
四要ハハ乃れハ服ハハきハふハハハ

かゝりて事はなはだうれしく
はせをはじめとして伊勢両宮
のうち船出よ御神をうけたる
見まいらせてうれしく
と人見まいらせそこれはうとはけ
遣者共なれいかゝしき事なれ
八幡慶長たゝみ宮遷宮を祝し
井上四郎秋月織江より補を品れ

あんをうたゝ流れるうとうとあり
同十二月廿四日彗星出又いかなる事ぞ
あんをうたゝ人あやしみあり
彗星はゆゑなきうとうの氣なり宮内有大長
和大祇といふ